

『フリーターとニートの社会学』

●太郎丸博 編

(世界思想社, 2006年, 四六判, 218頁, 1,995円)

●西田 芳正

(大阪府立大学人間社会学部准教授)



「フリーター」が社会問題として注目を集めてからおよそ10年が経過し、多くの研究が蓄積されてきた。本書ではそれらの検討を踏まえ、独自に実施した数量調査の分析結果を示すとともに社会学的な理論研究の必要性を提起している。

社会移動、ネットワーク、ジェンダー、労働と生活、自己評価、労働観といったテーマ群についての先行研究の整理とデータ分析が本書の主たる部分であるが、紙幅の制約から個々の紹介はできない。「フリーターは職業意識が未成熟であるためキャリア教育が必要」といった実証研究の裏づけを欠く議論に対してデータをもとに疑問が付けられるなど、各論文は社会学的研究の切れ味を説得的に示している。

編者と亀山俊朗の共著である1章と終章では、先行研究と政策提言に関する批判的な検討がなされ、社会学的な理論研究の必要性が提起される。研究を主導してきた労働経済学と教育社会学の研究者は、労働需要側の問題を指摘しながらも、政策提言としては就労支援とキャリア教育の充実を強調する。規制緩和基調の現代日本ではそうした提言しか耳を傾けられないと編者らは指摘するが、定義の内容も含めフリーター・ニートに関する議論の流れについて、研究者および政策立案サイド、マスコミ等の立ち位置や利害に即した知識社会学、構築主義的な検討を行うことこそ、社会学の切れ味を示すものとして踏み込んでほしかった。

さて、非正規雇用を拡大させる構造が改変されないかぎり、上記した政策では問題を解決できない。「フリーター・ニートを取り巻く社会構造を適切にとらえ、その析出メカニズムや彼らの行動や意識をうまく説明する理論研究」の必要性が強調され、ジェンダー秩序の問題、さらに女性、障害者、外国人などマイノリティを排除する構造の解明が不可欠の課題だと論じている。評者も、女

性の置かれた地位とフリーター問題の関連性を強く認識し、フリーターを「男女若年労働者のパート化」として捉えるべきだと感じており、ここで提示されるクリアな見取り図はたいへん参考になった。

他方、「階層としてフリーター・ニートをとらえる」ことの意義を編者たちは強調するが、これについては違和感が残る。フリーター・ニートは多様で一括りにできないこと、出身階層、学歴、性によって意識や行動、脱却と滞留の可能性が異なることが本書の分析でも確認されている。フリーター・ニートを出身階層と性に即して分析することの意義が再確認された、と考えるべきだろう。ただし、低階層出身で不安定な状態に置かれた若者が今後も増加し、そこに留まるとすれば、既存の社会階層の下位に新たな階層として彼・彼女たちが登場する事態が予想される。

そうした事態を回避するために、丹念な調査研究、理論的検討に裏打ちされた政策提言が必要である。その際、フリーター・ニートの意識や行動を調査研究によって明らかにすることは「道徳的アンダークラス言説」に根拠を与えかねないという指摘は重要である。皮相な理解に陥らない調査と分析、知見を構造的に位置づける理論的考察が求められる。

調査対象に既婚女性が含まれない、インターネットによる調査であることからくるサンプル特性の厳密な検討を欠くことなど不満な点はあるが、今後の調査研究を構想するために本書は必読の文献である。

学部の社会調査実習をもとに、大学院生との共同作業として本書は編まれた。「研究と教育のリンク」を目指してきたと編者は記しているが、その実り多い成果が得られたといえるだろう。

● 荻谷剛彦・志水宏吉 編

(岩波書店, 2004年, A5判, 299頁, 3,360円)

● 西本 裕輝

(琉球大学大学教育センター准教授)



本書は、東西の第一線の学力問題研究者たちが一堂に会し、児童・生徒を対象とした学力調査により得られたさまざまなデータの統計学的分析を通し、「誰のどんな学力が低下したのか」等について検討した優れた専門書である。社会的インパクトも大きく政策科学的研究としても高く評価できる。ただ、本誌『社会と調査』の書評という趣旨を評者なりに理解し、ここでは主に統計分析について、あえて批判的にいくつか指摘しておきたい。

まず気になる点は、全体的に見て、検定がほとんど行われていないことである。たとえば、第1章(耳塚寛明氏)では、1982年調査と2002年調査で学年別に学力の正答率の比較を行い、学力低下の実態を示そうとしているが、平均値が並べられているだけで検定は行っていない。言うまでもなく通常こうした分析にはT検定を行い、2群間の平均の差が意味のある差(有意な差)かどうかを検討する必要がある。悉皆調査でないかぎり、それなしにはいくら数値上大きな差が生じたとしても、通常は分析結果として論じることはできない。今回の調査では、サンプルは関東と関西の小中学生に限られており、最低限の検定は必要と思われる。同様に第2章(諸田裕子氏)や第10章(志水宏吉氏)など、T検定やF検定といった何らかの検定が行われるべきところ、数値の比較にとどまり行っていない。あえて行っていないのかもしれないが、評者にはその意図が不明である。最近の心理学では検定は最低条件として、さらにそれを超えて「効果量」をどう考えるかということに議論がシフトしてきている。そうしたことから、少なくとも検定を行わなかった積極的な理由について明示する必要があったのではないだろうか。

第二に、本書では重回帰分析や因子分析といっ

た、比較的高度な統計分析も行われているが、そうした分析に慣れていないのではないかと見受けられる部分も散見される。一例を挙げると、第6章(荻谷剛彦氏)では重回帰分析を行っているが、意味としてまったく逆の変数が独立変数として同時に投入されている点は問題ではないか。具体的には「文化階層下位」と「文化階層上位」が同時に投入されている(135頁表3)。「文化階層」という1つの変数にまとめていいのではないだろうか。現行のままでは多重共線性などの問題が生じ、結果に重大な影響を与えかねない。また第5章(山田哲也氏)では、因子分析を行っているが、複数の因子にまたがる項目がそのまま残っている(115頁表8)。重複する項目を削除して再分析するなど、解釈しやすくなってから結果を提示するべきだろう。

社会的影響が大きい本書だけに、このように統計分析が正確な手続きを踏まえていないとすると、得られた結果がはたして信頼に値するのかわといった類の批判も受けかねないだろう。編者は「あとがき」で世の中にあふれるとくに行政が実施する多くの学力調査を批判して「社会調査の専門家にとっては常識的とも言える調査の設計や分析の手続きがとられていない教育調査があまりにも多い」(269頁)と述べているが、はたして本書が専門家としての分析の手続きが充分とられている研究であると言い切れるだろうか。

以上のように、データの処理の仕方にいくぶん問題のある部分が見られるものの、今後改訂版などでの修正は可能であろう。資料として質問紙調査が掲載されていることから、今後さまざまな社会調査を試みる研究者たちの道標となることは間違いない。

書評

『路地裏の社会史』

——大阪毎日新聞記者村嶋歸之の軌跡——

●木村和世 著

(昭和堂、2007年、A5判、341頁、3,150円)



●中筋直哉

(法政大学社会学部教授)

近代日本都市史を、東京を調べるだけで安直にすませずに学ぼうとする者ならば、村嶋歸之の『ドン底生活』や『カフェー考現学』の名を聞いたことがあるだろう。本書は、著作集の編集にも携わった著者が、村嶋の生涯と業績を一次史料に基づいて描き出した評伝である。ジャーナリズム史、社会事業史、労働運動史に大きな貢献をなすものといえよう。

ところでこの書評は『社会と調査』誌のためのものだから、社会調査法あるいは歴史社会学の質的分析法として妥当かどうか、という点から本書を批評することが許されるだろう。評者は次の2点について批判がある。

第一の点は史料の取り扱い方についてである。本書は遺族保管の書簡をはじめ、非売品の遺族の回顧録や、村嶋の著した記事、小文、本を丹念に収集し、もっぱらそれらに基づいて記された。これは近代史学の方法としては標準的なものだろう。とくに遺族とラポールを温めて保管資料を発掘した功績は称えられるべきだろう。評者は、旧陸軍の将軍の遺族に、相手が音を上げるまで日記閲覧依頼の手紙を出し続ける、高名な近代史家の話を聞いたことがある。しかし、発掘された史料の真正性と、それがどのような史実を開示するのかという分析の正しさとは別である。平たくいえば、「本人がいうから正しい」では裁判はいらない。史料の意味は、それを生み出した社会の構成（言説と物財の空間）のなかに置き直してはじめて分かるものではないか。発掘された史料を意味づけるのに必要な、並行する史料の量および両者の関係づけが十分でないように思われた。ちなみに、この点は生活史の聞き取りの分析においても問題になることだろう。

第二の点は表題の「路地裏の社会史」を十分に描けていないのではないかということである。全

14章中それらしいのは、第2章と第12章の2つの章のみである。本書の方法によると、それは村嶋の筆を通してしか描き出せないもので、仕方のないことかもしれない。しかし問題は記述の多寡にあるのではない。著者が路地裏という解明すべき対象にあらかじめ特定の価値を与えていることにある。第2章の冒頭に、次のような筆者の独言が書き込まれている。「大阪は路地が多い。建てこんだ家と家との間に細い路地があり、そこは子供の遊び場になったり、近所の『おばちゃん』たちが縁台を出して豆のさやをむいたり、『おっちゃん』たちがビールを飲んだりしていたものだ」（32頁）。当節流行の映画『三丁目の夕日』風の描写である。しかしそうしたどかな場所ならば、村嶋はそこに労農記者として生涯挑戦し続けただろうか。たとえば、神戸の路地裏に生まれた評者の祖母は、評者の米騒動研究を読んで、「米騒動の時はそれほどでもなかったけど、川崎の争議の時は恐ろしかったなあ」と述懐した。それはそうだろう。祖母の生家は小商いで、職工たちとは生業も生活も異なる。路地裏とは生業や経歴の異なる多様な人々がその日暮らしのかぎりで関係と共同性を紡ぎ出す／切り分ける場所であり、それゆえにこそ、そこは中川清が『日本の都市下層』（勁草書房、1985）で詳細に解明したように、近代都市社会の揺籃でもあり、近代における社会的排除の出発点でもあったのである。評者は上に引用した文章以上の印象を、本書から読みとることができなかった。正確を期すならば、本書の表題は『路地裏の社会誌家』とすべきではなかったろうか。